風土を温める

シリーズ　高山の文化財⑯

【市指定史跡】

桐生町万人講

万人橋の西側たもとに、ひっそりと高山市指定史跡「万人講」があります。

金森時代、高山の商人町から東西南北に街道が整備されました。北は越中（現在の富山県）へ向かう「越中街道」で、この街道沿いに万人講が設けられています。名前の由来は、延宝三年（一六七五）に数万の餓死者をここに埋めたので「万人坑」と呼んだことによります。後に「万人講」と書くようになりました。

石碑移設後の万人講（手前は旧越中街道）

‡

敷地内には、天和元年（一六八一）に色都が建てた餓死者の供養塔や、文化十四年（一八一七）に法華寺住職日在が再建した水難除の笠の大きな法華経塔、寛政八年（一七九六）に小八賀郷大谷村の荒川久治と雲竜寺存妙による「南無三世諸仏」と刻まれた大原騒動刑死者の供養碑、さらにお六地蔵、悪女の墓、喚応是誰の墓等があります。

石碑などが多い理由は、近世この辺りが、飛騨唯一の刑場であったことと関係しています。今日と違い、当時は町外れで寂しい場所であったといわれています。文政十一年（一八二六）、僧是誰は谷屋（日下部家）の援助を受けて、ここに小屋を建て、処刑者の供養をしたり、道行く人に茶を接待したりしました。当時の茶釜、看板、そして是誰の木像などが今に残ります。

万人講茶接待所で使われた茶釜

‡

この是誰は「串柿仙人」と呼ばれて、町の人々に親しまれ、地元の民話にも登場します。なぜ串柿なのかと言うと、是誰が仙人修業で松倉山にこもった際に、串柿（串に刺した干柿）を持参したからです。

柿の学名は「ディオスピロス・カキ」といい、このディオスピロスは『神々の食べる果物』の意味です。

柿は正月などの伝統行事によく使われ、その形や色から、かつては魂の象徴と考えられていました。世俗を捨てた宗教者や山伏などは「柿の衣」と呼ばれる衣装をまとったと言います。上宝村でも、入定（聖者や僧侶の死）に際し、串柿が用いられた例が知られます。

‡

平成十五年度に、南側の道路の拡張工事に伴い、是誰の墓（無縫塔）も北に移されました。

今日、史跡の周囲は市街地化し、ずいぶん賑やかになりましたが、この一角だけは、いつも静けさが漂い、落ち着いた雰囲気を醸し出しています。

越中街道と万人講の歴史を今に伝えるこの史跡は、現在地元の町内会や保存会の方々により、大切に守り継がれています。

市指定　昭和三十年十一月七日
時代　江戸時代（十八世紀）
所有者　高山市
管理者　桐生町文化財史跡保存会
所在地　桐生町一丁目二九三番地
面積　九十四㎡

※毎年八月中旬に法要が営まれます。今年は十六日午後五時から営まれる予定です。

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています　印刷／有限会社 大六印刷